
Cheol-Hee Park × Takahiro Nakajima

[パク・チョルヒ × 中島隆博]

Contents

序 中島隆博（東アジア藝文書院院長）	1
対談 バク・チョルヒ×中島隆博	2
対談の後に	37
東アジアの新しい地平を開くために（バク・チョルヒ）	37
来るべき民主主義のために（中島隆博）	39
対談者について	43

序

中島隆博（東アジア藝文書院院長）

2019年に発足した東アジア藝文書院は、東アジア教養学という来るべき学問のために、その成果を積極的に刊行していこうと考えています。ここにお届けするのは、EAA ダイアログと銘打ったシリーズです。

ダイアログとはプラトンに由来する概念で、dia-logos すなわち「ロゴスを通じて」という古い意味を有しています。そして、その「ロゴス」には、言葉や論理に加えて、万物の根源や批判的な切断という複数の意味が重層的に交差しています。東アジアの概念に翻訳をするならば、おそらく「道」や「文」ということになるでしょう。「道」は語ることであり根源でありますし、「文」もまた言葉であり切り分けられたパターンであるからです。重要なことは、ダイアログは誰かとともに対話を行い、お互いにロゴスを吟味しあって、新しい地平を開こうとすることだと思えます。

EAA ダイアログは、東アジア藝文書院に集っていただいた方々との対話から生まれています。読者のみなさまには、そこに込められた学問への思いや望みを受け止めていただければ幸いです。何ができるかだけでなく、何を欲するのかが、来るべき学問にとってはどうしても必要なことだからです。

現在の covid-19 のパンデミックがあぶり出したのは、「既知」の諸問題でした。それらはすでにわかっていたにもかかわらず、様々な理由から「できない」とされてきたものです。来るべき学問は、そうした「既知」の枠組みを乗り越えるために、真に「未知」なるものに触れる責任があると思えます。

EAA ダイアログを通じて、ともに「未知」なるものを思考したいと思います。

Cheol-Hee Park × Takahiro Nakajima

[パク・チョルヒ × 中島隆博]

哲学書を読んだ高校時代

中島 わたしがいま非常に関心があるのは、気になるお仕事をされている方の幼年期なんです。一体その方は小さいときにどういう風景を見ていて、どういう本を読んで何を考えようとしたのか。パク先生とわたしは、多分世代的には近いので似たような世界を経験していたかと思うんですが、小さいときはどういうお子さんだったんですか。

パク わたしはソウルではなくて田舎で育ったんです。

中島 どちらですか。

パク 忠清北道のチュンジュ（忠州）というところで生まれて、そこで中学校まで過ごしました。高校はそこからそんなに遠くないチョンジュ（清州）という町に移って通いました。そして高校を卒業してソウルに行ったのです。ですので、韓国社会が変動するのにずっと付いていっているという感じなんです。チュンジュという街は人口が30万人くらいで、そんなに小さくありませんでした。

中島 わりと大きな地方都市ですね。

パク 国連の事務総長を務められたパン・ギムさんはわたしの小学校の大先輩です。高校はその当時「6大名門」と呼ばれていたひとつに行きました。今は入学するのに全部くじ引きになっているんですけど、当時は日本のように試験を受けて入ったんです。地方の名門校に通いました。そこで勉強して、ソウル大学に行ったのです。

- 中島** なるほど。小学校とか中学校、高校でなにか強く印象に残っている事件とか、印象に残っている読書体験とかはありますか。
- パク** そうですね。いろいろありますね。わたしはわりと早めに、高校の時期から哲学の本をかなり読んでいました。実存哲学のサルトルとか。
- 中島** わたしと同じ傾向である感じがしますね。
- パク** エーリヒ・フロムやフランクフルト・スクールの本を読んだり。
- 中島** 結構、韓国語の翻訳書があったんですね。
- パク** 結構あったんですよ。これらをあとで全部読んでみたら、それらが実存哲学やフランクフルト・スクールだったということが分かりました。
- 中島** 哲学青年だったんですね。
- パク** 少しはですね。そんなに真剣ではないけれどニーチェとか、なんだかこれは読んでよくわからないと思いながらも読んでいました。大学に行ってから、学生運動の時代だったので、マルクス全集、エンゲルス、レーニンとかヒルファディングとかグラムシとか、そんなものを読んでいました。若者は普通そんな本は全然読まないですから、変わった好みですね。
- 中島** 確かに。
- パク** 余計に関係ないものを読んだりしていましたね。

時代の大きな変化と政治学への道

- 中島** そうした哲学青年が、なぜソウル大学で今のようなご専門、政治学をなさろうとそもそも思ったんですか。
- パク** わたしの家族からは法学をやれと言われていました。
- 中島** 親御さんから。
- パク** 判事とか弁護士になったらどうかといわれました。親も兄もみなそう言うので、仕方がないなと思って、そうしようかとも思いました。しかし、法学はつまらないんですよ。
- 中島** よくわかります。わたしも法学部出身なので（笑）。
- パク** もう法律そのものがつまらなくて。これは勉強じゃなくて覚えることだと思いました。もちろん論理的な思考もあるんですけども、基本

的には決められたものを勉強して少し変えるという感じなので、やはり面白くないなど。その時代、韓国はとても大変な時代でした。パク・チョンヒがわたしの高校の時に亡くなって、大学に入る時にはチョン・ドゥファンが登場してきた、非常に政治的な変動期だったんです。ですので、別に政治家になろうということではありませんでしたが、政治学科に行ったほうがいいんじゃないかと思ったのです。社会科学の中でも世の中を変えられる力のあるものを勉強したいと考えました。

中島 それで政治学へ入っていったのですね。

パク やって見たら世の中を変える力はないんですけどね。

中島 いやいや。でも政治学といってもいろいろあるじゃないですか。どういう政治学に関心を持たれたのでしょうか。

パク 学部の時はかなり韓国政治を勉強しました。自分が住んでいるところの政治がなぜこうなっているのかに興味を持たざるをえませんでしたから、なぜわたしたちの国はこんな状態になったんだろうかと。学士論文を書きましたが、それはブラジルと韓国を比較したものでした。それぞれの国の発展経路と政治体制がなんで異なるのかについて書いたのです。修士課程もソウル大学でした。修士論文では、韓国で第二共和国と言われている時代、つまりイ・スンマン政権の独裁が終わって、パク・チョンヒの軍事クーデターが起こるまでの間の短い時間なんですけれども、民主政権があった時代について研究しました。その時代での民主政権の可能性と、なぜこれがクーデターによって崩壊したのかということの研究したんです。韓国の政治がどのように、なぜ権威主義にはまって、なぜ民主化に失敗したのか、そういうことを考えていたのです。

中島 その問いに対するパク先生の当時の暫定的な結論はなんだったんですか。

パク そうですね。当時、第二共和国について一番有名な論文は、いま高麗大学の名誉教授で、外務部長官も務められた経験をもつハン・スンジュ先生がUCバークレーで書いた博士論文でした。ハン先生の議論は、簡単に言うと、問題は国家や政府のほうじゃなくて社会のほうにあると捉えたものでした。しかし、わたしはそうではなくて、その時

期はやはりアメリカの影響が強かったので、アメリカがどう判断するのかという国際的な状況、文脈を入れて考えた方がよいと考えました。国際的な文脈と国家のガバナンス制度、その財政の能力を考えるとこのわけですね。それは国家理論というか国家中心の理論でした。国際的な文脈と国家のステート・キャパシティーとをあわせて考察しました。社会に問題があるという部分を否定するわけではありませんでしたが、やはり国家の自律性が足りないところもあったと考えたのです。

中島 ステート・オートノミーですね。

パク そうです。ステート・キャパシティーとステート・オートノミーが足りなかったのが、結局のところその政権を長く続けることが難しかったという結論です。

中島 ということは、パク先生の学生時代に韓国の民主化が目の前で展開をしているわけですが、その時に第二共和国の問題を考えるということは、今の民主化をどう基礎づけるかという問題でもあったわけですね。

パク そうですね。

中島 そうすると、パークレーで学ばれたハン先生と異なる意見を持ったパク先生は、実は社会の方に民主化の条件があるはずだと考えたというわけですね。

パク そうですね。みんなに、「あなたは勇気があるね。偉い先生と全然違う異論を出して大丈夫か」という感じでしたが。

中島 実際にも、韓国は民主化に成功したわけですね。

パク それはそうですね。わたしが修士課程に入ったのは86年で、修士号を取ったのは88年です。その間に闘争があって87年に民主化しました。そのように大学院の時代と民主化の流れとがぴったり合ったんですね。

中島 ぴったりですね。ちなみにハン先生はその目の前の民主化のことはどう評価されていたのでしょうか。

パク 彼も基本的には、第二共和国の民主主義を研究していたのはわたしと全く同じ理由からなんです。韓国がどうしたら民主化できるかということですね。

中島 同じ問題意識だったのですね。

パク しかし方法論的に、どこを見るかが違ったわけです。

中島 パク先生は韓国社会の条件が民主化に繋がっていて、その準備ができているということで、目の前の民主化を説明しようとしたわけです。

パク そうですね。だからアメリカに行ってから少しはその延長線上で韓国の民主化のことを書いたりしました。その時は、国家だけじゃなく韓国市民社会がどのように形成され、どのように連帯し、その後の民主化にどう繋がったかをもう少し深く考えて、第二共和国ではなくて87年の民主化はなぜ可能だったのかということを書いたりしたんです。

アメリカ留学の時代、カーティス教授との出会い

中島 当然そういうふうになりますよね。その後、コロンビア大学にいらっしゃったわけですが、なぜコロンビア大学だったんですか。

パク いい大学だからですね（笑）。

中島 わたしの友人はイエール大学を選んだときに、食堂の味が一番おいしかったから選んだって言っていましたが、やはりカーティス先生の存在ですか。

パク カーティス先生もいましたし、コロンビア大学は地域研究が盛んになっていったところでもあったんです。他の大学はもう既に地域研究をどうするかと悩んでいた時でした。ハーバード大学、コロンビア大学、UCバークレーぐらいが地域研究をちゃんと守っていたという感じですね。

中島 日本の政治に関心を持つようになったのは、アメリカに行ってからですか。

パク 本格的にはそうですね。修士号を取って3年ぐらい後にアメリカに行きました。軍隊に行ってきたからですね。90年には韓国でノ・テウ大統領のとき、民主自由党（民自党）という党ができたんです。

中島 覚えています。

パク 日本の自由党と民主党が一緒になって自民党が出来たように、本当に3党が合併して民主自由党になって保守政権をつくろうとしている

と。これは日本の自民党と同じじゃないかと。

中島 一種のコピーですかね。

パク そう、コピーみたいで、合併して革新勢力に対抗しようとしているのも非常に似ているじゃないかと。日本には長い民主主義の経験がありますから、もっとアジアの民主主義のために日本の自民党政治を真剣に勉強したほうがいいんじゃないという感じになったのです。

中島 確かに。自民党の長期支配というのは不思議ですよ。55年体制というのは奇妙な統治構造を作りました。

パク そうですね。やっぱりその時、わたしはもともとアジアの民主主義を考えていて、究極的には韓国がどうなるかも含めて日本の民主主義がどのように運営されているのかへの関心が強くなりました。幸いジェラルド・カーティスという最高の日本政治の専門家がコロンビア大学にいらしたので、非常に楽しく面白く研究ができました。

中島 カーティス先生との関係は非常に良好だったわけですね。

パク とても良好でした。隣の同僚とか同期とかみんなからうらやましいと言われていました。一つ例を出すと、カーティス先生は割に短気なんです。だからセミナーに報告論文を持って行って発表するでしょ。そしてなんだか訳の分からないことを2~3分ずっとしゃべったら、“Stop. What's your point?” と。

中島 早い早い (笑)。

パク あなたが本当に言いたいことはなんなのか、またつまらないことをずっと言っているんじゃないのかと。コロンビアの学生は、少しものを読んだという証拠や、証明をするための理論についてしゃべるのですが、あまり面白くないわけです。だからストップさせるんですよ。しかし不思議なことに、わたしが日本政治のレビューをずっとやっているときに、1時間しゃべってもカーティス先生が止めなかったんです。みんなの間に、なんでそいつは長くしゃべっているのに止めないんだという感じが漂いました。

その時は日本政治のいろんな著作を批評しました。カーティス先生が88年に書かれた、*The Japanese Way of Politics* (『日本型政治』の本質)として翻訳された)をレビューする順番の時だったんですけど、「わたしはここまでにしてこれ以上は遠慮します」と言ったら、

「なぜ」と仰るのです。「いや、韓国では自分の先生の本は評価しないのが礼儀で、そんなことをやったら大変ですよ」と言ったら、カーティス先生はニコニコしながら「たしかに危ないでしょう」という。それで再び「遠慮します」と言ったら、「いや、それでもやってみてください」と。「いや、困りますよ」と言ったら、「いや、やってみて」と。それで実際にやってみたら、どんどん顔が硬くなっていきました。

中島 そりゃそうでしょうね。

パク やっぱり褒めることだけじゃなくて、このあたりが弱いんですよという話をするわけですから。わたしがそこで批判的に言及したのは、カーティス先生は自民党を権力意志があつてとても柔軟性のある政党だと捉えていて、だからこそ長命で優位を持ち続けると言った点です。しかし、わたしは「カーティス先生、88年のリクルート事件後の日本政治を見てください。どんどん腐敗が増えているんじゃないですか。自民党はいずれは政権を失いますよ」と指摘したのです。

中島 実際に政権を失いました。

パク そういう話をしました。その場ではなにも言われませんでした。何日かあとで肩たたきながら「良かったね」と言ってくださいました。

中島 日本語を学ばれたのはコロンビア大学に行ってからですか。

パク 本格的にはコロンビア大学に行ってからですね。もちろん日本の文献を読むために韓国でも日本語の勉強を少しやったんです。その時、今は誰もそれを読まないけど、『標準日本語』とか訳のわからないもので勉強していました。そのために、日本語の文献はある程度は読めていたんですけども、コロンビア大学に行ってから本格的に日本語を3年ぐらい習いました。非常に役に立ったのはこの日本語の先生が英語がうまくなかったことです。初めに入ってきた時から「こんにちは」と言って、もう最初から最後までその先生はほとんど日本語でしゃべっていました。そうしたらもうしょうがない。付いていくしかありません。

中島 それはきついですね。

パク きつかったです。しかし、それを真面目にやったわけですよ。

中島 なるほどね。

パク 英語に頼らなくて、もう初めから日本語でしゃべりなさいという感じでした。

日本政治、現場でのフィールドワーク

中島 日本にも留学はされたんですか。

パク 留学はしていません。しかし、わたしの研究は現地調査、フィールドワークが必要なトピックでした。それは、小選挙区制に変わった後の自民党の選挙戦略と、その際に政党の組織づくりをどうやっているのかということでした。それはもう現地に入って見てみないと話にならない。ですから国際交流基金のフェローシップに応募して、それを獲得できたので日本に来たんです。それが95年です。

中島 博士論文はいつ出されたんですか。

パク 博士論文は95年から97年まで2年間日本でリサーチして、コロンビア大学に戻って98年に出しました。

中島 日本にいらっしゃった時には、平沢勝栄さんの選挙活動を中心にリサーチされたんですね。

パク ええ。わたしの著書『代議士の作られ方』（2000年、文春新書）は、博論の理論的な部分（政治学の専門家じゃないとわからない部分）は取り除いて、実証研究をしている残りの部分を翻訳してまとめて、刊行したものです。

中島 なるほど。カーティス先生が付き合っていた自民党の議員にはなかなかの大家が多かったですよね。

パク そうなんです。わたしが日本に来て最初に会った政治家は中曽根康弘さんですから。

中島 なるほど。中曽根さんとカーティス先生はずいぶん親しいと伺いました。

パク そうですね。仲良しですね。カーティス先生は、不思議なことに、三木武夫総理からずっと歴代の総理と仲良しなんです。

中島 そうみたいです。それがカーティス先生の学問の支えになっていると同時に、ひょっとするとまた限界をもたらしている可能性もありましたよね。

パク そうですね。でも彼は好奇心をすてなかった。客観的な話を聞いてそれを受けるだけじゃなく、自分なりに十分に判断をするので、そこはよかったと思います。わたしも政治家とかメディアの方に結構お会いして話を聞きますが、そのまま信じ込むことはほとんどありません。チェックしています。

中島 なぜ平沢勝栄さんを対象に選ばれたんですか。

パク わたしは平沢さんのことを、もう全く知らなかったんです。ですから、ある基準を決めておきました。やっぱり自民党の国会議員を調査対象にしたいと。そして組織づくりを見たかったので新人にしたいと。さらに田舎は後援会組織が盤石で2世や3世の議員とかがいるので、都会で初めて選挙に出る人がいいと。都会の議員の候補者を探す中で一番難しかったのは、勝てる候補者を選ぶことでした。これはもう神のわざです。これは賭けでした。

中島 たしかに負けちゃったら代議士がつくれませんからね。

パク 本当にギャンブルでした。

中島 平沢さんも当時はまだ弱かったですからね。

パク ええ。紹介してくれた人も政界で長い人なんですけど、初めはみんな心配しながら、大丈夫だろうと思うけどわからないよと言っていました。それで後藤田正晴先生から紹介してもらったんです。後藤田さんから話がいくとノーとも言えないから。

中島 平沢さんはたしか警察庁出身ですよ。

パク 警察庁出身で、後藤田さんの補佐官だったんです。後藤田さんが官房長官を務められたときの警察組の補佐官でした。だから後藤田さんから言われたからもうノーとも言えなくて、「はい。わかりました」と、初日からちゃんと対応してくれました。

中島 そして非常に運よく当選してくれた。

パク 彼はそのあとずっと8回連続当選しています。他の自民党の候補者が東京で落ちているときも彼は生き残りました。

中島 最初は基盤が弱かったけどだんだん強くなっていきましたね。

パク そうですね。彼は選挙がうまいんですよ。典型的なドブ板選挙です。本当に頭を下げて、あちこちに行って。昨日もその平沢さんをよく知っている政治部の記者が1日取材のために同行したんですけど、そ

のときは葛飾にある神社 31 軒を全部 1 日で回っていたという話をしていました。そんなこと平気でやっているんですよ、平沢さんは。

中島 やっぱりある意味、典型的なドブ板選挙をやれるということですね。

パク 後援会管理と典型的なドブ板選挙、だから負けないんですよ。

中島 それで平沢さんが勝ったので、博士論文ができたんですね。

パク そうですね。落ちたら博士論文は完成できない。だから大きい賭けでした。本当に。

中島 博論自体の大きなテーマはなんだったんですか。

パク Election Campaigning in Urban Japan です。

中島 まさに都市の選挙。

パク 日本の都市部の選挙のキャンペーンです。理論的に言うと、選挙制度が変わって、そこに政治アクターはどのように適応するのか。そのことが二大政党制をつくることになるのか。それによって政党中心の組織になるのか、ということです。

中島 その時のパク先生の結論はどうだったんですか。

パク その時はまだ始まったばかりなので、基本的に後援会づくりということとは変わらなかったし、わたしは今も変わっていないと思いますよ。

中島 ということは、二大政党制という理念はなかなか十分には実現しない。

パク そんなに簡単にはできあがらない。

中島 実際そうでしたね。

パク ええ。民主党政権のとき、わたしはその政党を支える組織をずっと見てきたのですが、やっぱり政治家 1 人の力量とか周りの側近だけではわからない。今も安倍さんの個人の能力とかその側近の頭の良さとかで支えているのではなくて、それを支える組織がどのくらい強いかが重要です。そうでなければ長続きしないのです。

中島 組織の強さですか。

パク それがどれくらいあちこちに偏在しているのかを見ていたのですが、民主党政権は幸いに誕生はしたんだけど、長続きするのは難しいだろうと。

中島 支える基盤がない。

パク そうです。やっぱり地方議員が弱い。支える組織は労働組合しかな

い。そして一部の市民です。そういう状況なので、これはよほどの技がないと難しい。しかも政権の運営そのものも非常にアマチュア的に下手でしたね。だからこれはもう難しいと思いました。安倍政権になってみたら、具裕珍さんの分析にあるように、日本会議といった自民党を支える新しい右の組織の影響力などもあり、やはりどんどん彼らは組織頼みのことをやっています。だから勝手に無党派層にアピールするという、わけのわからないことをやるのではなくて、ちゃんと組織を固めた上で、右には日本会議、中道に創価学会、そして従来の保守、それを全部固めた上で無党派層とも付き合う。労働組合にも手を出しています。

中島 労働組合のメーデーに安倍さんも行っていましたよね。

パク 行きますよ。彼らのウイングを広げるということです。それに対して、野党が押さえられる組織は非常に限られているんです。一時期田中角栄が自民党を百貨店、デパートのような政党だと言っていましたが、今の自民党もデパートですよ。なんでもある。そこに右もあれば中道もあれば、ややりべラルもある。

中島 安倍さんの政策を見ても幅が広いですよ。

パク そうです。ただ、選挙のときはみんな保守系を固めるために非常に刺激的に右のことを言って固めるんですけど。そして選挙が終わったら、また中道に戻る。そうすると右の人たちは「え？」という感じになる。

日本と韓国の政治の比較から見えてくるもの

韓国の政治

中島 そういう日本の、それこそ社会的な条件の分析をされるというのは、最初のお話にあった、韓国の民主化を支える韓国社会と比べるというお気持ちがいっぱい強いわけですよ。この観点から自民党を分析されて、韓国の民主化以降の政治過程と比べて何か特徴をお感じになっていますか。

パク そうですね。韓国は日本より市民社会、それは労働組合に限られませ

んが、市民社会が強いです。

中島 デモとかを見ているとそういう印象があります。

パク ええ。かなり伝統があって市民社会が強いし、若者、学生の政治関与というのも高い。日本と違うのは、ひとつに頼る固まった組織が少ないということです。労働組合は今の与党系をずっと支えてやっているんですけど、これも振り子のようにスイングしている。動いているからなかなか読みにくい。だから変動が激しい。

中島 振れ幅が結構あるわけですね。

パク そうなんです。だから日本が政治的な安定を持っているのは、政治家の力量もあるんですけど、やっぱり中間団体をちゃんと押さええていることが大きい。それが非常に安定するための素材になっているんですね。それなりには動くけれども、画期的には動かない。振り子だったら真ん中に石を入れているイメージですね。

中島 振り子の幅が小さいということですね。

パク 中間団体があつたらそんなに振れない。振れるけど微動するくらいです。韓国は右から左まで大きくガーンと動きますから。

中島 韓国は振れ幅がやっぱり大きいですね。中間団体もそうなのでしょうか。

パク 韓国と日本とでは中間団体の仕組みがかなり違うと思います。また韓国は大統領中心制ですから。

中島 権力が強いんでしょうね。

パク 権力は強いし、それに対抗する気持ちも強い。韓国は選挙制度と関係なくほとんど二大政党制なんですよ、基本的に。

中島 そうですね。名前はコロコロ変わりますけど。

パク 名前は変わるけれど基本的には二大政党制からあまり離れていないんです。だから大統領選挙を見てもうほとんど五分五分ですよ。49対51ぐらいでしょうか。

中島 それぐらいですね。

パク いつもそんな感じなんですよ。だから面白いところがあります。

中島 韓国の大統領は退くと皆さん捕まってしまうますが、何らかの利益団体と結びつかないと政権が持たないことがあるんですか。

パク 民主化した後、いわゆるデモクラティック・コンソリデーションをや

るとき、あらゆる制度を全部民主化したほうが良かったと思いますが、まだ足りないところがあります。何が一番そうかという、いわゆる権力機関を中立化していないんですよ。警察庁、検察庁、国税庁、国家情報院、監査院、公正取引委員会とか、これらは全部権力を持っている機関です。そこにある程度の中立性を持たせるべきなんです。これらは政権とは関係なく国民のために働いている機関なので、もちろん権力からなんの影響もないことは不可能なんですけど、与野党問わずこれらは国のためにいい仕事をしている機関にすべきなんです。ところが、権力に従う機関としてそのままずっと残っている。権威主義の流れをそのまま引き続けているんです。

中島 切れないんですね、まだ。

パク 切れなかった。改革できなかった。わたしはそこを改革し始めたら全く変わると思います。

中島 その機運というか方向性はだいぶ見えてきたんでしょうか。

パク まだ弱いです。というのは、野党側にいるときは自分がやられる側だから改革しようと言うけど…

中島 権力を取ったら…

パク 権力を取ったら自分の手の中のいい道具だから捨てないんですよ。

中島 なるほどね。

パク だから検察にやられても自分が権力を取ったら、それを使ってまた野党とか市民団体とかを全部切っちゃう。やっぱりこれは矛盾ですね。

中島 その繰り返しをどう断ち切るのでしょうか。

パク どちらからでも、非常に素晴らしい政治家が出て自分が与党のとき、これは終えましようと言うしかないですね。このような機関は、人事も含めて公正なやり方でやっていくということ、警察が権力を使うときはそうしたルールに基づいてやっていくということをやらないと、続いていくと思います。

日本の政治

中島 なるほど。日本の政治に戻りますと、わたしが学生時代に京極純一先生の『日本の政治』（1983年、東京大学出版会）を読まされるわけです。それを見る限り、自民党政治がどういう形でできあがったかが詳

しく書かれているわけですが、自民党はたとえば社会党的な理念とか政策などをどんどん入れてしまうので、やっぱり強かったということでした。

パク そうですね。そうだと思いますね。

中島 今はどうでしょう。日本の政治過程で考えると一応 55 年体制は終わったと言われているじゃないですか。しかし、本当に終わったのか、それとも別の形になっているのか。

パク ちょっと形が変わったと思いますね。しかしこのごろ感じるのは、野党側が 55 年体制に戻っている感じなんです。与党じゃなくて。

中島 反対勢力として。

パク そうです。立憲民主党は昔の社会党、国民民主党は民社党、これはちゃんとそのまま残っている。支えている組織も、総評系は立憲、同盟系は国民、昔の共産党は変わらないから、野党側はこのまま 55 年体制ですよ。

中島 なるほど、そう言われるとそうですね。

パク だから理想的にも護憲、憲法改正反対、原発反対とか、もう反対ばかりなんです。

中島 昔は社会党がそうでしたね。

パク あなた方が政権を取ったらどうするつもりという感じです。だから自民党が今やっていることに対しての実現可能性のある代案がパッと出てこない。野党側はかなり 55 年体制に戻っているような感じなんです。

中島 戻っていますね。ただ、問題は自民党ですよ。

パク 自民党はかなり変わっています。

中島 昔は派閥等が切磋琢磨するというモデルで説明されましたが、今は派閥じゃないですよ。

パク 派閥は残っているけど昔ほどではないですね。昔は自民党の 5 大派閥が争いながら内部で政権交代をしていました。疑似政権交代ですね。

中島 今はそれはないんじゃないですか。

パク ないでしょう。しかし昔自民党は、理念で集まった集団ではありませんが、中曽根派、福田派のほうはちょっと右、田中、大平の経世会と宏池会は中道ぐらい、三木派がちょっと左ということで、真ん中で政

権をめぐる争いをしていました。他の国はその国全体でそのような形をとっていますが、日本では自民党がそのミニチュアだったんです。しかしいまは、これが広がってしまったという感じを持っています。広がったというのは自民党内部での権力争いが非常に弱くなっているということです。形があまりなくなりました。



中島 ないですね。

パク その代わりに公明党が中道でしょう。やや保守化しているんですけど。昔、自民党の保守本流とリベラルがやっている役割を今は公明党がやっているんですよ。

中島 宏池会とかが果たしていた役割ですね。

パク 右に走っちゃったら駄目で、社会福祉もちゃんとやらないといけないよというふうに公明党が牽制している。平和路線からそんなに離れると駄目だよ、改憲もそんなに乱暴にやっちゃったら駄目だよと。

中島 そうか。公明党が与党に入ってからそうなったのですね。

パク 公明党は与党の中の野党です。だから自民党は非常に強くなるわけです。しかも票も融通しあっているから、昔だったら中道と革新を合わせれば自民党に対抗できる感じだったんですけど、今、最大の中道政党の公明党が自民党と組んでいるので野党が攻めにくい。だから野党の武器を全部取りあげているのは公明党なんですよ。公明党が抜ければ自民党は散々やられると思います。

中島 平沢さんは昔、公明党とやり合っていましたよね。

パク 公明党の山口さんとやった方なので。

中島 公明党批判の最先鋒だったかと思いますが、今はどうなんですか。

パク 今はそうでもないけど、さすがに葛飾の創価学会の人は平沢さんには入れないでしょうね。白票で、何も書かない。

中島 棄権するだけ。

パク 棄権です。

中島 自民党が公明党と手を組むという決断をしたのはいつでしたっけ。

パク 99年です。

中島 そこで風景が変わったわけですが、その後公明党に関していうと、創価学会が世代交代がなかなかできないじゃないですか。例によって高齢化していて、縮小し始めているわけですよね。

パク そうですね。

中島 そうすると、将来的に公明党の支持基盤が弱くなるわけだから、中道がどういう動きをしていくとパク先生は予測しますか。

パク それでも、他と比べればちゃんとした組織があるところです。票でいうと以前は900万票ぐらい取ったのが今は700万票を切っています。弱くなっているのは事実なんですけど、それでも700万票ぐらい取れる組織は他にありませんから。

中島 ないですよ。

パク たとえば日本会議はどのぐらい取れると思いますか。わたしは票としてはそんなに取れないと思います。彼らは広報宣伝はすごくまいんですけど。日本のメディアは、以前はあまりにも日本会議を過小評価しましたし、ある時期にはあまりにも過大評価しました。もうちょっとバランスよく現実的に見たほうがいいと思いますが、これがもう一つの自民党のいいところで、日本会議という右の組織をちゃんと自分に付けたわけですね。だから羽が両方あるという感じなんです。右に日本会議、左に創価学会と公明党。その間を行ったり来たりしながらもそんなには揺れない。右のほうに偏ったら左がうるさい。何を言っているんだ、もうやり過ぎだ、そこまで行くな、と言います。ところが、左にサーッと行くと日本会議などの右のほうから、そこまで行ったら自民党じゃないという感じになってバランス取ってしまう。

中島 そうすると、韓国では、中道の人たちはどういう振る舞いをするんで



すか。

パク これは完全にスイングボートですね。

中島 それぞれを見てどっちかに入れちゃうんですか。

パク 入れちゃう。非常に大ざっぱに言うと、30%のリベラル、30%の保守があって40%ぐらいの中道があります。だから行ったり来たりするわけですね。そのために政権交代は激しいものになります。

中島 単純に考えれば、じゃあ中道を軸にした政党をつくらうと思うじゃないですか。40%を取れるんだから強いはずですよ。それはどうなのでしょう。

パク いや、それをつくらうとしたら、もしくは独自の勢力になろうとしたら板挟み状態になるんです。アン・チョルスさんが新しい政治を言っているんですが、しかしできない。両方から攻めて取っていくからです。

『東京新聞』のコラムで論じたアメリカと中国の問題

中国をどう捉えるか

中島 パク先生が連載されていた『東京新聞』のコラムでは、アメリカの問題、それから中国の問題を相当議論されていますよね。

パク はい。

中島 最初は中国から伺いたいと思います。中国は今、東アジアでいろんな影響力を持っています。その中国の政治過程に対してパク先生はどのように評価されているんですか。

パク このごろは、もう国に関係なく権力が集中している形が見て取れます。たとえば、アメリカではトランプ大統領のホワイトハウスに、日本では総理官邸と安倍首相に。韓国でもムン・ジェイン大統領と青瓦台に。中国も習近平国家主席を中心とした権力の中枢機関に権力集中している感じなんですね。

中島 そうですね。

パク 地方の自律性を見ても、何もないわけではないんですけど、やっぱり弱くなっています。中央集権的なところがどんどん強くなっていっ

て、集団指導制と言う場合でもやっぱり頭は大きいという感じになってしまった。

中島 そうなりましたね。

パク ポリティカルリーダーがどんどん重要になっているんじゃないかという感じがしますね。

中島 わたしが最近よく聞くのは、民主主義を、どのように今評価し直すのかという問題です。たとえば中国のようなタイプの中央集権というのは、非常に効率的なところもあるわけですよ。意思決定のプロセスが非常に効率的で、結果としてうまくいく場合も相当出てきている。そうすると、民主主義はプロセスがやっぱり時間もかかるし、意思決定がうまくいかない可能性も高いわけです。そうすると、民主主義は制度として不十分じゃないかという議論が最近よく出てきています。これがひとつですね。

もう一つは、じゃあ、中国は民主主義と真逆をいっているかというところ、どうもそうとも言い切れないところがあります。たとえばパーティー・ステート理論、すなわち共産党と国家が一体だとする党国体制の理論があります。それを支えているのは、ルソー的な一般意志の議論です。共産党は正しく一般意志を代理しているからこそ、それはイコール国家なんだ、というわけです。それに対して、日本の自民党やその他の政党は、特殊意志しか代表していないから問題だというわけです。韓国の政党も同様で、特殊意志同士がぶつかっているから、真の民主主義は実現していないのではないかと。こういう議論があるわけです。

パク そうですね。ありますね。

中島 ただ、もう一つ面白い議論があって、ルソー型の民主主義というのは、実は非常に特殊な民主主義であると。それに比べて、トクヴィル型のアメリカをモデルにしたデモクラシーもあるのではないかと。渡辺浩先生（東京大学名誉教授）は、トクヴィルのアメリカのデモクラシーにならって同時代の中国のデモクラシーを探求する論文をお書きになるんですね（三浦信孝・福井憲彦編著『フランス革命と明治維新』、白水社、2019年所収）。かつての中国にはトクヴィル型のデモクラシーに近いものがあつたとも言うのではないかと。

要するに、中国を見るときに、三つの可能性があります。第一は韓国とか日本で展開しているデモクラシーの制度的な不備を中国から批判するという可能性。第二は、ルソー的な一般意志を、実は中国が最も純粹に体现しているんじゃないかという可能性。第三には、アメリカ型のトクヴィルが見たようなデモクラシーの可能性です。その上で、どういうふうに今中国を通してデモクラシーを考え直していけばいいのか。

パク そうですね。中島先生がおっしゃるように、中国は効率性から考えてみると非常に合理的な体制をつくっていると思います。というのは、このごろ中国のやり方で非常にうまいと思うのは、政治家を育てるやり方です。競争させてちゃんと育てるんですね。党内民主主義でいろんな経験をさせていく。地方の党書記もやって、省長を2つぐらいやって、さまざまな行政経験を重ねたうえで、やっぱり彼はできるねという人を集めてリーダーにする。

中島 それは他の国とは異なる点ですね。

パク 韓国のムン・ジェイン大統領は国会議員を1回やっただけで大統領になりました。トランプ大統領も行政経験なしで民間企業のトップから大統領になった。これらがいいものか悪いものかわかりません。中国では行政経験を北京だけじゃなくて地方でもさせて、いろんなレベルで見てきますね。そこで汚れた人は全部途中で切られる。身体検査をちゃんとやっている。中国的なシステムはポリティカル・リクルートメントの面では非常にいい、優れている体制だと思います。

中島 人材登用制度としてはかなり優れていますよね。

パク ただ、民主主義というのは、一般意志とか特殊意志とかそれらに関わるかもしれないけど、本当の民主主義というのはやっぱりトクヴィル的なところがなくて、市民社会の独立性や自立性が必要なんです。気楽に息をしてなんでも自分がやりたいことを、国の顔色を見なくてもやれる。そのようなオートノミーが必要なんですけど、中国ではそこはやっぱりまだじゃないですか。

中島 かつての中国にはひょっとすると可能性としてあったのかもしれませんが、今の中国はそれとはだいぶ違う社会構造になっている。パク先生がおっしゃるように、やっぱり政治家の質というのが中国は高いん

です。はるかに経験があるし、はるかに優秀だし、韓国とか日本の政治家はかなわない。

パク かないません。彼らが若いときから本当に党の中でいろんな訓練をして身に付けた経験則というのは非常に強いと思いますね。

中島 ただ、問題はやっぱり地方の政治の現場におけるアマチュアリズムですよね。いや、これは別にプロじゃなくてもアマチュア同士の普通の市民が感じていること、それをどうやって表現をしてそれを集約するのか。そのプロセスが、民主主義にとっては非常に重要だと思うんですね。もちろんなにか間違ったことも言うわけですよ、普通の感覚でやると。でも、それをなしにやっているとちょっと息苦しいところもありますよね。

パク そうです。全く同感なんですけど、わたしは中国式民主主義、韓国式民主主義というのには反対なのです。そんなものはない。民主主義は民主主義。

中島 もちろんそうです。

パク 韓国もそのパク・チョンヒ大統領のとき韓国式民主主義と言ったので、民主主義じゃないのになんで韓国式民主主義なんだという話をしていました。みんなそれで学生運動をやったわけです。中国の長期的な課題はやっぱりそれだと思いますね。市民社会の自律性、それをどのようにある程度持たせるのか。それと中島先生が今おっしゃった、利益代表のシステムをどのように多様なチャンネルを通じて中央に伝えていくのか。下からボトムアップのプロセスがどのように反映されるのか。これを反映する利益代表システムをつくることができるのか。もう自分たちはできていると言っているんですけど、いや、まだ弱いでしょう。それと、権力が汚れているときの批判は、やっぱり政党同士が戦ってやらないと難しいんですよ。自分が自らの身を整理してちゃんとやっているからというだけでは、強い権力は全部腐敗するし、駄目になるのが結構ありますから。そこに対しての牽制は必要です。

中島 チェックアンドバランスをどう入れるかというのは絶対に必要ですよ。ね。

パク 中国は基本的には一党でしょう。日本は1.5。(笑) それでも野党と

いう存在があるから、権力者は身を清めるといことがあります。

中島 そうですね。あんまり無理なことはできないですね。

パク できません。しかし中国は今や中央集権的になって、牽制勢力というのは内部にしかないので、長期的に安定性は保つかももしれないけど、どのように権力に対してのチェックアンドバランスが行われていくかはわかりません。中国にとってもこれは重要な課題でしょう。どのように、その仕組みをつくるか。だから昔、中国共産党の人たちは自民党が一党優位をどのように保つのかをずっと研究していたんですね。

中島 一番深く研究していました。

パク 一番深く研究して、自民党のようにやりたいと。野党がちょっとうるさくやっているけど基本的に一党優位は失わないという体制を中国でつくりたいという願いが結構ありましたから。

中島 でも結局自民党にはならなかったですね。

パク ならなかったですね。やっぱりパーティー・ステートですから。

中島 そうですね。日本もほぼパーティー・ステートなんですけどね。でもちょっと中国のやり方とは違う。

パク 違うんですね。

アメリカの変化と東アジア

中島 アメリカに話を移しましょうか。トランプ政権です。わたしたちはみんな半分驚いたわけです。まさかと思っていたら本当にトランプが大統領になってしまった。そのあたりをどうお考えになっていましたか。

パク なんでそうってしまったのかを考えるのに、2つの要因が大きいと思います。1つはグローバリゼーションです。自由貿易というのは、基本的には世の中のために非常に有益なことなのですが、グローバリゼーションにおいて自分たちがドアを開けているとどんどん何かが入ってくる。出ていくことよりも入ってくることの方が多いという認識が生まれ、自分たちは何かやられてしまっているという余計な不安感を持つようになる。その一方で、自分が何か相手を不安にさせるものを出しているということは否定している。強力な軍隊を世界に出していて、ドルを世界で使っているにもかかわらずです。

中島 自分たちの好きなように使っている。

パク 自分たちが好き勝手にやっていることは当然として、自分たちの側にモノとサービスが入ってくるのは嫌だという。これはやはりおかしい。トランプ的な考え方を見ると、自分たちが世界を支配できる力をどれくらい持っているのかがちゃんとわかっていない。閉じてしまえば自分たちがどんどん後ろ向きになっていくことをわかっていない。孤立主義とかアメリカファーストとか言うんだけど、アメリカの覇権の本質ということを本当にわかっているのかという感じがします。

中島 それが怖いですね。

パク 怖いです。もう1つの要因は移民です。ドアを開けていまだに移民を受け入れているんですけど、そうすると、やっぱりアジア人やヒスパニック、黒人が増えて白人が追い込まれるという意識がとても強いんですね。簡単に言えば、ホワイト・レイシズムですよ。もともとホワイトの国だったのになんでこうなってしまったのか。このまま状況を放置しておくで完全に白人がマイノリティーになると。ですから、この国は根本的に変わってしまうんだという危機意識がトランプ政権を支えていると思いますね。

中島 かといって、今のアメリカが世界覇権を手放すつもりもないわけですよ。

パク そうなんですよ。

中島 ところが世界覇権がなんであるのかをわかっていないわけでしょう。そうすると非常にアンバランスが生じていて、アメリカ自体が世界を不安定化させる原因になっているように見えるんですね。

パク トランプ大統領はやり方とか言い方が非常に激しいために、みんな混同するんですけど、基本的にはリトリート、撤退を念頭においています。オバマ前大統領も基本的にリトリートだったので、アメリカの撤退というのは別にトランプ政権が始めたことではありません。中東から身を引いたでしょう。

中島 そうですね。

パク しかし中国は大きくなっているから、ここはちゃんと関与して抱き込もうとした。抱き込もうとしたら中国はどんどん拡大し続けたために、今度は逆に押し出そうとしているんです。

中島 今はそうですね。

パク トランプ政権がやっていることで、逆にアメリカの力が昔ほどではないということがわかってしまった。だからアメリカが提供しているサービスにちゃんとお金を出しなさいということになります。あなたとわたしは同盟だからお金を出しなさい、と。韓国も防衛負担金をもうちょっと出しなさい、日本もうちょっと出しなさい、ドイツも出しなさい。国防費を GDP の 2% は払いなさいと言う。でも十分に出してはいません。それと、やっぱりアメリカ一国ではできないから、あなたたちもこちらと一緒に集まって一緒に戦いましょうということ言う。それを一番よくわかっているのは安倍首相じゃないですかね。だから集団的自衛権を組み込んだ安保法制を作って、あなたが困るときわたしが助けてあげますと言ったわけです。我々がカバーできる地域はインド太平洋だということをはっきり宣言したのが安倍首相の路線だと思いますよ。

中島 そうでしょうね。

パク アメリカを外から支える。そのようなところをコーリション・オブ・ザ・ウィリング (coalition of the willing) として入れる。アメリカの力が下がっているところを埋める。自分の友達を通じてネットワークをつくって、基本は維持しながらもアメリカの役割を少し減らす。これが、今トランプのアメリカがやっていることだと思います。完全に引くとは思えません。ちょっとずるいやり方なんです。アメリカはあなたを大事にするから、あなたはアメリカがやっていることを助けて、ポケットマネーを出しなさいという感じなのです。

中島 今の安倍政権もしばらくは付いていくでしょうけど、日本経済もあまり良くないのではたしていつまで付いていけるかどうか、そこはちょっと不安定なところがありますよね。

パク そうですね。今アメリカに挑戦できる潜在力を持っているのは中国ぐらいでしかないのです。そのうち中国とどのような関係を設定するのかというのは大きな課題になるでしょうね。

中島 それが出てくるでしょうね。

パク おそらく冷戦時代のように封じ込めとかもできないでしょうね。

中島 全く無理でしょう。

パク そうです。それができないから、結局は、じゃあ、どのようにしたら牽制できるのか。しかし、バランスも取りたい。バランスといっても中国がどんどん大きくなっていて、また、その中国とそれ以外のところを全部固めるのも無理です。だからどのように中国とのバランスを取りながら、一方でどのように取り込んでいくのか。中国を排除することは無理でしょう。

中島 無理です。大きすぎるから。

パク 大きすぎるし、もう既に隅々にネットワークが入っているので、切ろうとしても切れないですね。

中島 皮肉なのは、今の世界の自由貿易体制を守ると言ったのは中国なんですね。

パク トランプのおかげで急に習近平国家主席のほうが自由貿易を擁護する人になってしまったのですね。

中島 10年前では考えられないことです。今は完全に逆転してしまいました。

パク ええ。実際に中国も、この自由貿易の国際秩序に乗かって国家の発展を実現してここまで来たので、彼らが自由貿易をうたっているのはうそではないと思いますよ。それは必要なことですから。開かれた貿易秩序というのは自分たちにも役に立ちますからね。中国が保護主義に走ったら駄目でしょう。

中島 駄目です。

パク 世界に比較的安いものを売っているんで、これを閉じてしまうようになれば自己矛盾ですよ。だから自由貿易をちゃんと立てないといけませんね。彼らはある時期から覇権という言葉を使っていないでしょう。昔は反覇権とか言っていたのですが、自分たちが覇権を握っていると感じているからそうなのではないでしょうか。しかし、自分たちが覇権になったときには、どのように世の中を管理するのか、安定化させていくのかということを実際に考えなきゃならないじゃないですか。

中島 そうですよ。

パク アメリカはハードパワーも強かったんですけど、やっぱりソフトパワーに魅力があって、そこは民主主義の国で人権を大事にして、法の

支配を守っているからある程度の安心感を与えていました。アメリカのやり方というのはそんなに乱暴ではないと。勝手に暴力を振るうこともあるんだけど、しかしそれは、自分が気に入らないところはその他のところと相談して武力を使う。そのように勝手には使わないというところはあった。国連とか国際組織を使って、大義名分をつくってやっているんだと。ブッシュのイラク戦争とかは全然でたらめでしたけどね。

中島 でたらめでしたね。

パク でも、やはりそのような安心感があったので信頼されたんですね。一方、中国に対しての不安感はまだあります。中国の力は強くなっているんですけど、本当に公平に力を使えるのか、本当に他のところにも渡すものを渡しながらやっていけるのか。気に入らないところを本当に許してあげるのか、そういうところはいまだにわからない。

中島 そうすると韓国と日本はその間に挟まれているわけですけどもどうしていったらよいのでしょうか。

パク それはとても重要なポイントです。

東アジアを共にどのように構想していくか

中島 東アジア地域を、わたしたちは、今度はどう一緒に構想していけばいいかということですね。

パク 中島先生がおっしゃるように、日本と韓国は少なくとも東アジア構想、国際秩序に対しての同じ感覚を共有しなければならないと思いますね。今は共有されていないという幻想を持って戦っている感じなんです。

中島 これはちょっとよくわかりませんね。

パク よくわからない。わたしはある種の幻想だと思うんですね。そう思うんですけど、やっぱり中島先生がおっしゃるように、日韓がちゃんと東アジアを見る目、国際秩序を見る目がある程度共有しなくてはなりません。もちろん、すべて同じにはならないと思いますよ。やっぱり国家対国家ですからね。しかし7割、9割をオーバーラップさせるのはそんなに難しいことではないと思うんです。

- 中島** 今日パク先生とこうやって話をしている、わたしはその見方がよくわかるし共有できるという気がするわけですよ。
- パク** 違和感はないでしょう。
- 中島** 違和感がないわけです。日韓で東アジアをどう見るかということに関して、そんなに大きな違いをわたしは感じられない。ところが政治のレベルでは最近ずいぶん激しくやっているじゃないですか。
- パク** 慶應義塾大学名誉教授の小此木政夫先生が、韓国と日本は東アジアの事実上の双子に違いないんだ、本当に似ているんだと言っています。本当に見た目も似ているし考え方とかやり方とかも非常に似ているんですよ。この現実を客観的に見ると韓国と日本はパートナーにならざるを得ないし、パートナーになったほうが得するわけなんです。
- 中島** そうだと思います。良いパートナーにどうなるのかですね。
- パク** 日本は米中の中で足を多分7対3ぐらいの割合で入れているんじゃないかという感じがします。韓国は6対4か5対5ぐらいで入れている。しかし日本から韓国を見ると、中国にもっと踏み込んでいて、より中国に付いているんじゃないという見方をしているんですけど、それは韓国への理解がいまひとつ足りないことだと思います。やっぱり韓国と日本はアメリカを支える側、簡単に言うとアメリカを味方にしていたほうがいいんですよ。中国という国がまだ信頼できるころまではきていないので、お互いの信頼感が高まるころまではアメリカと付き合っ、そこを基軸としたほうが少し安心感を与える。しかし中国を別に排除する必要はないでしょう。
- 中島** 排除できませんし、してはならないと思います。
- パク** 基軸はやはりアメリカのほうに置いて、我々が望んでいる秩序ができあがるまでは中国との付き合いも公平にやって、バランスを取ってやったほうがいいと思います。その面では全く同じ利益を持っているんですよ。
- 中島** そうだと思いますね。
- パク** ところが、このごろわたしが感じるの、先に述べた幻想をつくっているグループが両方ともにあることです。両方ともオーガナイズド・ノイジー・マイノリティーがいる。韓国においては、民族主義的な色が非常に強い左派が反日の塊なんです。挺対協のようなグループ

はもう日本はけしからんという感じで、普通の人と比べると考え方が極端に走っているんですけど、メディアはこれが面白いからそこばかりずっと取り上げるわけです。日本に伝わる声はこの声のみです。だから、韓国は全部反日じゃないかと。もちろんそれはとんでもないのです。それは本当に一部の話なのにこれがザーッと伝えられる。彼らはどっちかという北朝鮮に親近感を持って、中国を許して日本に対しては極端な反対勢力なのです。そっちが中心だと受け取ったら、韓国はそっちにいつちゃったねという感じになるわけなんですよ。これはひとつの幻想だと思います。マジョリティーはそういうふう考えていない。一方で、韓国から見ると日本も日本会議のような極右団体や民族主義の塊があって、彼らは排外主義者で、日本の中でプライドをちゃんと守ればいいという主観を持っています。我々は韓国が嫌いだから、韓国とは付き合えないから切り捨てようという声がかなり強い。またメディアはそちらが面白いからまたザーッとこれを報じるんですよ。普通の日本の市民、マジョリティーはそのように考えてはいないのに。

中島 全く考えていません。

パク そこがもう争点になってしまう。

中島 争点として目立ってしまうわけです。

パク 目立ってしまうので、お互いに錯視現象が起きるんですね。幻想を持っているグループが自分たちで考えているお互いの部分を語ることだけが伝えられて、その幻想が錯視をつくって信頼をどんどん損なっていて、あいつらは駄目だねと言う。

中島 今パク先生がおっしゃるような錯視の構造があるということを理解すればよいわけですね。それをメディアがどう表現するのでしょうか。

パク そうですね。国政もそうなんですけど、外交関係でも多様な意見がちゃんと提示され代表されているいろいろやりとりをするのが普通なんですけど、現状では双方共に極端な意見が目立っています。わたしは日本と韓国両方とも、政治家が歴史の捕虜になっていると言っているんです。彼らが民族主義勢力をあまりにも気にしている。他の声もいっぱいあるのに。指導者のほうが指揮を取って「すみません、あなたが言っていることもよくわかるんですけど、国益のためにはこれが必要

なんです」と説得すればいいのに、マイノリティーの声を逆にあおってそっちに乗っちゃっている。トラに乗っちゃったんですよ。だから下りられない。それは自分の強力な支持グループだから、そこに乗かって、結局それにサービスをしながらやっていることです。

中島 そうなると、かえってまずいことになりますね。

パク かえって動けないんですよ。

中島 ある歴史学者は、歴史学は過去の研究をするんだけど、それはなんのためにやるのかという、過去から解放されるためだと言っているんですね。我々には過去からうまく解放されていないところがあると思うんです。それは過去を捨てて未来志向といったところで解決しない。過去に対する見方をともに議論して、複雑さを見失わないようにすることで、はじめて過去が過去になるのだと思います。ところが、過度に単純化された議論は、こうしたプロセスを省略する場合があります。そしてそうした議論に政治家が乗っちゃうと本当にひどいことになってしまいます。それではしょうがないわけです。

パク先生がお書きになっている中でもうひとつそうだなと思ったのは、日韓もそうですけれども、日中とか韓中もそうですが、パイプがあまりないじゃないですか。これはどうしたらいいんでしょう。

パク そうですね。どんどん薄くなっていますね。こんなにグローバル化の時代になって、市民同士の交流が深まっているのに、政治家は国家中心主義になってどんどん離れていっている感じです。

中島 そうなんです。

パク だから一般市民が往来しているのと全く逆なことをやっているんじゃないのかと。

中島 一般市民のレベルでいうと、もう本当に韓国、中国、日本は近い感じですよ。

パク 政治家がやっていることとは関係なくやっているでしょう。

中島 すごくコミュニケーションをしています。政治家のやっていることが浮いちゃっている感じなんです。

パク そうです。だから一般市民の観光交流、文化交流は何を見ても国籍と関係なく動いているし、経済はグローバル化して、まさにグローバル・サプライチェーン・プロダクション・ネットワークが変わったの

で、もう国と関係なく国境を越えて立っているわけなんです。これは当然なのですね。政治だけが非常に国家に縛られてこれを守らないといけないと考えている。特に東アジアでその傾向が強いですね。ヨーロッパはある程度それを越えてしまったので。

中島 EUをつくりましたからね。

パク EUの国々は、国境を持って、みんな国を持っているんですけども、でも自由に往来できて、けんかをしてでもルールに基づいて解決できる基盤をちゃんとつくってきました。東アジアでもそのような関係をつくるべきだと思います。

中島 条件はだいぶできてきましたね。

パク そう思います。ソウル大学国際大学院でも、政治、外交、社会科学を研究している人や経済・通商・貿易を研究している人たちが大勢いるんですが、経済学側の人たちと議論していると、彼らは経済や金融、貿易になると国境ってないんだよと言います。それなのに政治学とかではなんでそんなに国境にこだわるのかという話をしているんです。一定の地方自治体にも境はありますから、境というのはやっぱり必要なんですけど、境が絶対的なものになると、実際にはその下が全部崩れていたりしているのに、一番上の境だけを棒を持って守ろうしていることになります。そのようなことで本当に大丈夫なのか。

中島 政治をどう定義するかはさまざまにあると思うのですが、ある国家にとってなんの機能が一番大事かという、税金を取って再配分する機能が政治の大きな役割だと思うんですよね。ところがどの国もそうですけど、財政赤字なわけです。国の再配分機能が落ちているわけです。じゃあ、どうやって財が回っているかという、グローバルな経済システムで回るようになってきているわけです。ところが、それが格差を生み出す方向にいつまわっているのが問題で、何らかの調整やレギュレーションは必要なわけです。それにしても、国家が何かをやるという範囲は、ずいぶん狭まっているという気がします。

パク かなり狭まっていますね。

中島 そうですよ。

日中韓の次世代のための仕組みづくり

- パク** 今、日中韓でキャンパスアジアというプロジェクトをやっているのをご存知ですね。
- 中島** はい、東大もやらせてもらっています。
- パク** わたしもその設計をした1人です。わたしが全部作ったものではないけど、わたしの同僚と設計をしてこのプロジェクトを実現しました。これを提案したのはわたしのヨーロッパアニストの同僚なんです。ヨーロッパのエラスムス・プロジェクトを参考にしました。
- 中島** エラスムス計画ですね。
- パク** エラスムス・ムンドゥスを東アジアでやったほうがいいんじゃないかということで、わたしも賛同して実現させました。時間をかけてやってきました。もう既に10年過ぎたでしょうか。そこでの狙いは何かというと、日中韓の関係がこのままでは駄目だと。少なくとも次世代、未来世代は全く違う経験をしてもらいたいと。行ったり来たりしながら長期滞在をすれば相手に対する理解は深まるだろうと。
- 中島** 深まりますよ。
- パク** そういうことで、日中韓の若者が往来する仕組みをつくって国が支援するという形にしてみんな楽しくやっているわけなんです。今、中島先生たちは、East Asian Academyを構築されようとしています、そこではちょっと違うことをやったほうがいいんじゃないかと考えています。本当に肝心なところは指導者なんですよ。政治家、リーダーを教育すべきなんです。日中韓の、既にもう総理になっている人を教育するのはさすがに無理ですから、若手の政治家をちゃんと教育したほうがいいんじゃないかと思います。教育するといったら言い方は悪いけど、お互いに真剣に議論しながら考えをわかち合う場をなんらかの形でつくらないといけない。若者たちが次の世代の中で中心的な役割を担うには20~30年かかってしまう。しかしその間に、上の世代の人たちが全部悪くしちゃっては駄目なわけです。
- 中島** そうですね。わたしはパク先生の今のお話には大賛成です。このEast Asian Academy for New Liberal Artsというのはキャンパスア

ジアと理念がかなり重なっています。最近はやや日中関係が良くなってきましたけど、日中関係という特に難しいところで、北京大と東大が連携をして、ジョイントで教育・研究をやってみるという努力はしようと思っています。

パク 必ずソウル大学も入れてください。

中島 もちろん。それこそヤン・イルモさんをお願いをされていて、ソウル大学に入ってもらうことはもう決まっているんです。英語を中心としてやりましょうということにしています。この枠組みにソウル大学にも入って頂いて、ANUも加えて、東アジア共同体みたいな、将来の制度をなんらかの形で考える。でも、そのためにはやっぱり若者たちが経験を共有しないといけない。その場をとにかくつくっていきましょうことです。

おっしゃるように、それは20~30年かかるわけですよ。その間の時間をどうするのかというので、若手の政治家にどうアプローチをするか。わたしはたまたまご縁を頂いて、松下政経塾に2年ぐらい関わっていますが、政治家を目指す人ばかりじゃなくて、もっと違う方向に行くという感じになっていて、松下政経塾がかつて果たした役割が変わってきた印象を受けます。そうすると、東アジアで政治家というのをどうやってもう一回鍛え直すか、今はその仕組みがないんです。おっしゃったように、中国は中で政治家を結構鍛えますから、彼らは案外できているんですけど、日韓にはなかなかない。そこをどうするかですね。

パク 今中島先生のお話を聞いて考えると、ひとつはまず、しっかりした若者、次世代への教育をしたほうがいい。若手の研究者、学部とか修士じゃなくて既に博士号を持っているアカデミーの世界での卵をちゃんと育て、お互いに共同研究をするような仕組みをつくる。その面ではわたしもいくつかのことに実現させています。東アジア日本研究者協議会を作ったのは2016年でした。日本、韓国、中国、台湾にある日本研究機関のコンソーシアムをつくって、学術大会を一緒にしましょうと言って、その組織に次世代研究者の枠を30人つくって入ってもらったんです。大学院のレベルのちょっと上にいる若手の研究者、ちゃんと資格を取っている若手研究者の育成というのも、まだ足りな

いんですよ。それを日中韓のレベルでやるべきです。それと、実務的な中堅のレベル、メディアの方とか、若手の政治家とか、政治家を目指している方とか、そのような人を育てる仕組みがわたしたちには必要だと思います。

ところが、お互い、自分たちのことよりヨーロッパとかアメリカのことをみんな勉強している感じなんです。隣同士で本当にちゃんと勉強しないといけない。歴史も哲学も文学もその社会の仕組みもやっぱりちゃんとわかるべきなのにそこに至っていないんですよ。

中島 日中韓の3つが横に並んで前だけを見ているわけです。アメリカとかヨーロッパを。でも横のお互い同士は見ていない。これは非常に良くない。

パク 見ていません。昔は日本が先頭に立ってフライング・ギース (flying geese) になっていたのですが、いまだに日本の古い方たちは、日本、韓国、中国という順で縦に並ぶような感じで、まだ中国と韓国を見下げているけど、それは間違いだと思います。

中島 そんなことはもうとっくに終わっています。

パク だから全く平等ではないけど、日中韓、みんな肩を並べるようになったんですね。このように変わっている日中韓の関係を頭に入れて、どのように同伴者意識を育てながらお互いを理解して信頼関係をつくるのか、理解を深めるのか、これこそが大きな課題になると思いますよ。これに失敗したとき我々は葛藤するでしょうね。

パク先生の今後について

中島 最後に、パク先生はこれからの研究なり、制度的な活動なり、なにかあなたに構想していらっしゃることはありますか。

パク わたしの研究テーマは大学で教えていることと同じです。同心円のようになっています。日本の政治と外交は、もともとわたしが絶対に捨てられない自分の領域ですね。そうすると、わたしは韓国でやっているから日韓関係ということを考えるのも避けられない。もう逃げられないんですよ。

中島 そこは絶対に問われますから。

パク あなたは日本をよく知っているじゃないと言われる。だから日韓関係ということをやっている。しかし日韓関係というのはパイの、二国間関係の話をもう超えているんですよ。これからは東アジア全体を見なきゃならない。だから東アジア国際関係を教えているわけなんですね。もうちょっと深めたいところがあるとすると、個人的には、ひとつは比較ですね。比較地域学。東アジアと北米、ヨーロッパの仕組みを大きな目でマクロ的に比較することです。これはもうひとりでは絶対に無理ですね。それと域内の比較、日中韓の仕組みとかの比較というのをもうちょっとやってみたいと思います。

わたしが、学生を育てる際に、「あなたはそれをやりなさい」といっても、もしわたし自身がひとつの国しか知らなければ説得力はありません。比較をやるためにはどこかの国・地域に対する理解が深くないとできない。でも自分の国も知らない人って多いんです。

中島 ほとんど知らないですよ。

パク 何も知らない。自分が最高だということはみんな言っているけど。

中島 そう、なんにも知らない。

パク 自分の国は最低か最高かは決まっているんですね。しかし、自分の国や相手の国のことをちゃんとわからないと、もともと比較ということではできない。だからちゃんとわかって、それを比較しながら、自分を自己相対化する能力を深めるべきです。自己相対化ができないから民族主義に固まるわけです。

中島 そうそう、狭い見方に陥ります。

パク わたしが大事で一番上だという感覚、いやいや、それはそんなもんじゃないんだと。

中島 それではあまりに子どもっぽいですね。

パク 本当に子どもっぽいですよ。もうちょっと勉強しなさいよと。もっと成熟した考え方を持ったほうがいいという感じですけど。やっぱりそれは比較すること、歴史を知ることでしょう。それなしでは自己相対化というのは不可能ですから。

中島 今そうしたお話を伺っていると、パク先生が卒論でブラジルのことを入れたこと、国際的な文脈を入れたということが思い出されます。あの意味、そのときの思いをずっと持ち続けているんですね。

パク そんなに変わっていないんですね。

中島 それが今よくわかりました。

パク 自分の住んでいる韓国はいつも元にあって、韓国とブラジルを、韓国と日本を、韓国とアメリカをという感じでいっていますから、わたしの原点から離れていないという感じがします。

中島 離れていないですね。

さて、これが最後の質問ですが、パク先生はご自身の専門以外で、定年しようがしまいがかまいませんけれども、本当はこういうこともやってみたいということはなにかあるんでしょうか。

パク そうですね。みんな年を取るとそうなるかもしれないけど、人文学がもっと必要だということを冗談じゃなくて感じます。歴史、哲学、文学など人に対しての深い理解ができないと、やっぱり浅くなるんですよ。その面ではもっと歴史を勉強したいな、哲学の勉強をしたいな、小説をもうちょっと読みたいな、映画ももっと見たいな、と思います。わたしも年を取ったなと思います。昔はそんなものは言葉の意味にしかならないと思ったのに、いまはやっぱりそれが必要だと思うのです。あとは、ビジネスですね。やっぱり人とやりとりしながらいろんなことをやっているの、グローバルなビジネスのことを考えてみたい。ビジネスといってもお金をもうけることじゃなくて。

中島 仕組みですか。

パク このようにグローバルになっているところで、その仕組みがどのように、もしくはどのようなやりとりを可能にするのかということです。わたしは原則論に走るよりは実用主義、プラグマティズムに関心があります。そこでは交換の論理が基本だと思いますね。エクステンジ。自分のことを実現する、自分の目標だけ実現できればもう死んでもいいというのもいいんだけど、やっぱりお互いにやりとりしながら成熟し成長していくことが重要だと思います。自分の哲学が正しいから死ぬまでこれを守って、これで死にますということではちょっともったいない。

中島 なるほど。

パク だからグローバルなやりとりというのはどうなっているのか。ここはビジネスの世界が一番先端を走っているの、時間があればそんなと

ころを考えたいと思います。健康であればまだ30年は生きるだろう
とと思っているので。

中島 すごいですね。本当に今日は長い間ありがとうございました。貴重な
お話を伺いました。ありがとうございました。

パク ありがとうございました。



対談の後に

東アジアの新しい地平を開くために

パク・チョルヒ

中島先生に会ってから何ヶ月しか経っていないのに、古くからの友人のような気がする。何よりも同時代を過ごす同じ世代の知識人だからだろう。中国の哲学に深い見識をお持ちの中島先生と日本を長く見てきた私が出会って東アジアを語り合うのは自然な出来事だったかも知れない。しかしこれは偶然だけではなかった。東京大学の新しいプログラムの一つであった Tokyo College の特任教授として本郷に着任したのが5月31日。丸二ヶ月を東大で過ごした。非常に充実した期間であり、実りも多い体験でもあった。

中島先生の下で特任助教をしている具裕珍さんの紹介で会ったのが初めてであった。具さんから同じく東アジアを研究する方なので、共にできる仕事やプロジェクトがあるかも知れないという軽い提案があり、気楽に会ったわけだ。しかし昼食をかねての二時間くらいの対話は非常に面白かったし、知的な刺激が多かった。誰かがその対話を聞き取っていたら良かったと思った。あらゆる分野と争点に関する知的な対話は、初めての議論だったのにかなり深入りした。それを機にしてこの本にまとめた対談が行われた。

中島先生は人の関心を引き出し、面白くて深いポイントを取り上げるのが非常に上手かった。なぜ私がここまで話をするのかと感じるところまで私の本音を引き出した。「口説き上手」という日本語が頭に浮かんだ。

話の内容は二人の共通の関心事を語り合うことではあったが、対談を終えてから読み直すと、私自身の考え方を整理することができたと思う。韓国の民主主義に興味を持った理由、コロンビア大学に行って日本研究に集中した理由、指導教授のカーティス先生との逸話などは、多分私が自分の経験を公で話した初のことだと思う。私自身の思い出にもなるし、東アジアを研究す

る後輩の役に立てたらとも思った。

対談の核心は、東アジアをどう発想するかであろう。中国に関する理解が深い中島先生の見方から沢山のことを学んだし、私も自分の意見を隠さずに出した。アメリカ一辺倒でもない、中国への傾斜でもない、韓国と日本の生き方について意見が一致したのは幸いであった。それで、新しい東アジアを開くために文化的理解、次世代の教育、市民の交流を深めるべきだという点でも異論はなかった。

中島先生と語り合った新しい東アジアの未来を拓くためには、相当の時間と努力は必要かも知れない。しかし誰かが始めないと進まないことも事実であろう。そのためには発想の転換と哲学の整備が必要だろう。中島先生との対談を披露するのは遠くない未来に新しい東アジアの道が作られるのを期待したからである。夢がないと夢は実現できない。今すぐは実現できないかも知れないけど、夢を見て語る機会を作ってくれた中島先生に、この場を借りて改めて感謝を申し上げたい。

中島先生とは同年輩の忙しすぎる学者同士で、将来も同じ道を歩みながら協力しあう良いパートナーになれることをもっと期待したい。日本と韓国の民主主義の発展、日韓関係の改善、東アジアの平和と繁栄をともに作り上げる友人になりたい。

2019年10月

紅葉を窓から眺める秋に

対談の後に

来るべき民主主義のために

中島隆博

奇縁といえば奇縁である。パク・チョルヒ先生との出会いは実に偶然的であったにもかかわらず、周到に準備を積み重ねてきたようにも思えたからだ。1963年の生まれだと知ったので、わたしと同じ時代を呼吸してきたことになる。そしてどうやらいくつかのすれ違いがこれまでであったようなのだ。

まず一つは、パク先生が2016年に作った東アジア日本研究者協議会である。日本からは国際日本文化研究センターが参加している。ちょうど東京大学でも国際総合日本学というプログラムを始めていた頃で、東アジアの日本学との連携をどうするかを議論していて、パク先生の名前を何度か耳にしていたのである。

もう一つは、コロンビア大学のジェラルド・カーティス先生である。昨年だったか、たまたまお目にかかる機会があり、カーティス先生のこれまでの日本政治研究の一端を伺っていた際に、パク先生の名前をやはり耳にしていたのである。

とはいえ、「会うべき人にはいつかきっと会うはずだ」となぜか楽観的に考えてしまうために、すっかりパク先生のことは忘れてしまっていた。今年になって東京カレッジの招聘で東大に滞在していることを教えてくれたのは、東アジア藝文書院で特任助教を務めてくれているク・ユジンさんであった。あらためて話を伺ってみると、クさんがソウル大学の大学院で学んでいた時の指導教員がパク先生であったとのこと。灯台もと暗しとは、まさにこのことであった。

さすがに今回はすれ違いというわけにはいかないと思い、東アジア藝文書院にて対談をお願いしたところ御快諾いただいた。奇縁はようやく繋がった

のである。そして、2019年7月12日に対談を行い、その記録をここに採録した。

わたしにとって興味深かったのは、同世代の韓国の学者の思考の変遷であった。1980年代半ばは、わたしたちが大学生の頃である。その頃、脱政治化が進行していた東大から、わたしは韓国の民主化のニュースをずっと追いかけていた。今では見かけることが少なくなったが、当時の大学の構内は様々なピラが撒かれていたし、政治的なものをめぐる集会もそれなりにあった。それは、韓国ではチョン・ドゥファン大統領、中国では胡耀邦総書記、台湾では蔣経国総統、日本では中曽根康弘首相の時代であった。チョン・ドゥファン政権は1980年の光州事件の後、高まる民主化要求の中で崩壊していき、1987年の「民主化宣言」、1988年のソウル・オリンピックへと時代が移っていった。しかし、それはまだベルリンの壁崩壊の直前だったのである。冷戦体制はデフォルトのものとして、わたしたちの想像力を深く規定していた。それでも、中国での鄧小平体制による改革開放、台湾での戒厳令解除（1987年）、そして韓国の民主化と、東アジアの風景は確実に変わろうとしていた。その中で日本はバブル景気に突入するところで、東アジアの変化とはどこか波長の合わない雰囲気であった。「遅れてきた青年」として、当時きわめて政治的であったわたしは、こうした雰囲気を「精神的鎖国」と戯れに呼んでいた。

そうした背景があるために、同世代の東アジアの学者に会うといつも、置かれてきた社会状況と学問の構築の仕方が気になって仕方がない。この対談にあるように、パク先生は当時の眼前に展開する民主化の可能性の条件を、第二共和国の時代と比較することで模索するという道に進んだ。そして、韓国社会の中に民主化の条件があることを何としても基礎づけようと苦心していたのである。これは日本では戦後に丸山眞男たちが行おうとしたことと重なるものであるが、「戦後民主主義の「虚妄」に賭ける」と言わざるをえなくなった丸山との違いもまた明らかである。

わたし自身は、学部時代が終わり、大学院に入ると、実際の政治運動や政治過程というよりは、「政治的なもの」の方に関心が向かい、哲学的なディスコースにおいてそれを探求するようになっていった。脱政治化の流れの中で政治的であることにはかなり消耗させられたこともあったのかもしれない。その時期に、パク先生はコロンビア大学に移り、日本の戦後民主主義を

支える組織的な条件の探求に向かっていた。その研究の成果が、『代議士のつくり方——小選挙区の選挙戦略』（文藝春秋、2000年）である。55年体制を変えて、二大政党制を実現するために導入した小選挙区制であるが、その現場はどうなっているのかを明らかにしたものだ。そして、草の根から見ると、日本の民主主義の構造は、小選挙区制を導入したとしても変わらないというのである。なぜなら、民主主義の構造を規定している組織が変化していないからだ、というのである。

言われてみれば、それもむべなるかなである。というのも、脱政治化と「精神的鎖国」が大きな枠組みになっている以上、自らの構造を変えることはかなり難しいからである。日本の外からパク先生が日本を見ると、韓国社会にあった民主化を可能にした条件とは異なる条件が日本社会にはあるということなのだ。

とはいえ、「精神的鎖国」をいつまでも続けることは難しそうである。ベルリンの壁崩壊後に、冷戦体制は崩れたが、東アジアでは冷戦構造が依然として残っている。このようにベク・ヨンソ先生（ヨンセ大学）が述べておられたが、「精神的鎖国」が可能であったのはまさにこの冷戦構造の継続のためであったのだろう。しかし、それはどこまでなおも力を持ち続けるのだろうか。冷戦体制あるいは冷戦構造の一方である「西」が、トランプ政権の登場やブレグジットによって、根本的に変質しつつあるとすればどうだろうか。また、経済の低成長とデジタル化・AI化の進展は、従来の組織をおそらく無用化してしまうだろうし、脱政治化の行き着く先には、テクノロジーによる超政治化が待っているかもしれない。

わたしたちは今日、あらためて民主主義とは何であるのか、何であったほうがよいのかが問われている。その際に、少なくとも、東アジアの民主主義の可能性の条件を付き合わせる努力は必要であろう。パク先生の切り開いてきた道のその先に、わたしたちは共に向かっていくほかないのである。

来るべき民主主義のために、この同世代の対談が賛否を含めて参考になればと思う。

2019年10月

災害のつきぬ秋に



対談者について

パク・チョルヒ（朴喆熙）

ソウル大学国際大学院教授・同大国際学研究所所長。同大日本研究所所長、国際大学院院長、韓国現代日本学会会長を歴任。2019年6～7月に東京大学東京カレッジ特任教授として東京滞在。専門は日本の政治外交、日韓関係、東アジア国際関係など。著書『代議士のつくられ方——小選挙区の選挙戦略』（文春新書）、『自民党政権と戦後体制の変容』（ソウル大学出版文化院）など。

中島隆博

東京大学東洋文化研究所教授・同大東アジア藝文書院院長・中国社会文化学会理事長。専門は中国哲学、比較思想史。著書『悪の哲学——中国哲学の想像力』（筑摩選書）、『莊子——鶏となって時を告げよ』（岩波書店）、『思想としての言語』（岩波現代全書）、『残響の中国哲学——言語と政治』『共生のプラクシス——国家と宗教』（以上、東京大学出版会）など。

編集者

具 裕 珍 (EAA 特任助教)
前野清太郎 (EAA 特任助教)
宇野瑞木 (EAA 特任研究員)
崎濱紗奈 (EAA 特任研究員)

EAA Booklet 2

EAA Dialogue 1

Cheol-Hee Park × Takahiro Nakajima

著 者 パク・ Cholヒ 中島隆博

発 行 日 2020年6月11日

発 行 者 東京大学東アジア藝文書院

製作協力 一般財団法人東京大学出版会

デザイン 株式会社 designfolio / 佐々木由美

印刷・製本 株式会社真興社

© 2020 East Asian Academy for New Liberal Arts, the
University of Tokyo